

# 寄裂着物にみる美意識

## —「丹波生活衣」から—

前田 美穂・森 理恵

The aesthetic sense in piecing:  
From “Tamba-Seikatsui” clothes in Tamba region

MIHO MAEDA and RIE MORI

**要 旨：**本研究は、「丹波生活衣」に含まれる寄裂着物30点の資料を調査分析し、そこに表れた作り手の美意識を探ろうとするものである。調査の結果、時代への対応、赤い色の配置、材質の使い分け、左右対称性を基本にした意匠計画、柄合わせなどに、作り手の意図を明確によみとることができた。そしてそこから、寄裂という行為に込められた福知山の人々の思いや、憧れの対象として京都を意識しながらも地域の独自性を保持してきた、福知山の衣生活の姿を知ることができた。

(2002年9月9日受理)

### 1 研究の資料

#### (1) 「丹波生活衣」について

本研究は福知山市丹波生活衣館所蔵の「丹波生活衣」を対象とするものである。「丹波生活衣」とは、故河口三千子氏が福知山市とその近郊における江戸末期から昭和30年代までの衣類を蒐集された一大コレクションである。昭和63年に福知山市文化資料館に寄託され、平成7年には福知山市民俗文化財重要資料第一号に指定、現在は福知山市の所有するところとなりその点数は3300点にのぼる。古い衣類のコレクションといえば、山陰地方の絵紉を蒐集する村穂久美氏のものや藍染めの堀内泉甫氏のものなど数多くある。しかしそれらのほとんどは、蒐集家の個人的趣味により収集範囲が「紉のみ」「藍染めのみ」「刺し子のみ」と限定されている。対して、「丹波生活衣」の特徴は、福知山の人々の生活にかかわってきた衣類を個人的趣味に左右されることなく収集している点である。本研究において、「丹波生活衣」を選んだ理由は二つある。一つは収集地域がある程度限定されているので、資料の背景がわかりやすいこと、もう一つは人々の

生活に密着する衣類全般にわたる傾向を見出しやすいことである。

なお、「丹波生活衣」を語る上で忘れてはならない人々がいる。このコレクションを実質的に整理・管理するボランティアの人々である。昭和58年から福知山市文化行政は由良川流域地方の調査の一環として河口氏のコレクションの調査を始めた。これもボランティア団体が主体となって福知山市へ働きかけた結果、実現したことである。また、彼女たちは平成6年に「丹波生活衣コレクション・ギャラリー建設をすすめる会」を正式に発足した。毎年一回、総会が開かれ、会員にたいする事業報告とともに、講師を招いて福知山を深く勉強することも怠らない。この会が進めてきた主な事業を下にあげる<sup>1)</sup>。

- 一 丹波生活衣への理解・協力要請に関する事業
- 一 丹波生活衣の収集・保存管理に関する事業
- 一 丹波生活衣の調査・研究に関する事業
- 一 ギャラリーの建設構想を策定する事業
- 一 関係機関への陳情・協力要請に関する事業
- 一 その他目的達成に必要な事業

これらの事業が実を結び、平成14年3月に「福知山市

京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科生活デザイン専攻

Course in Living Design, Department of Environmental Design, Faculty of Human Environment, Kyoto Prefectural University

<sup>1)</sup> 「丹波生活衣コレクション・ギャラリー建設をすすめる会規約」より抜粋。

丹波生活衣館」が誕生したのである。

河口氏は蒐集活動によって福知山の衣生活、その主体である福知山の人々をもつ気骨を後世に伝えようとした。その福知山人の気骨は、「すすめる会」のボランティアの女性のなかに受け継がれているように見える。かつては生活衣の作り手であり、現在は守り手と立場は変わったが、自らが生活衣を支えるという強い意志は時代をこえて見事に継承されたといえる。

## (2) 福知山の繊維関連産業

福知山の川口・三岳・金山地方では古くから、山地や傾斜地を利用して桑の立木育成が行なわれていた。由良川河畔の微高地では砂質土壌を利用して楮・藍・綿とともに桑を立木として栽培していた。また由良川河畔平地では明治後期まで、洪水がおきても被害の少ない桑の立木栽培が盛んで、その立木下は藍の作り畠になっていた(福知山市史編纂委員会, 1992, 356)。

一方、近世から明治にかけては、福知山でも木綿と藍が多く生産されており、実際、明治17年の京都府興業意見書では、生糸の物産価格174,646円、実綿は216,213円と繭よりも実綿のほうが多い(同, 365)。しかし明治維新後、富国強兵政策から京都府は養蚕伝習に力を注ぐ。質の高い日本の生糸は主要輸出品目で外貨の獲得源であったからだ。由良川河畔は江戸時代から養蚕の盛んなところであったが、明治前期その品質は劣等視されていた(奥村, 1998, 245-6)。しかしながら以後、「蚕種も養蚕技術も組織的な官民一体の努力改良によって生産品質が一定し、しかも優良となった」(福知山市史編纂委員会, 1992, 536)という。

## (3) 寄裂着物の定義

本研究では「丹波生活衣」のなかの寄裂で構成された着物を資料とする。近代では裁縫書が出版されたり、塾形式で裁縫を個人教授したが(河村, 1990, 69)、新しい反物を使って着物を仕立てるときには、本の通り、習った通りに裁断し、縫製すればよい。しかし本研究の寄裂の着物は、着古した長着を解いて下着に再利用したり、余り裂で仕事着の破損部分を補修したりしてできた衣類である。再利用する裂の大きさ、破損の状態などその時々で異なる。その都度、仕立てる人が裂の配置を考えて臨機応変に仕立てていかねばならない。何故この位置にこの裂が縫い付けられたのか、作り手の縫製意図は、寄裂の着物を調査することによって知ることができる。そこから、近代福知山における、作り手の意識から見た衣生活の姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。

「寄裂」という語は、「切継ぎ、縫合せ、切嵌め、切付けが、主に技法から生まれた語であるのに対して、寄裂はそれらの技法によってできた状態である」とされる(岩崎・田中, 1993, 201)。本研究の資料には縫合せ、切付け等さまざまな技法が用いられている。しかしながら、

本研究は製作過程ではなく出来上がった意匠を検討するので、さまざまな技法によって裂が縫い合わされた着物の状態を示す「寄裂」の語が適当と考えられる。従って、本研究において「寄裂着物」とは、複数種類・複数枚の裂を継ぎ接ぎして一枚の着物をつくったものであると定義する。

## 2 既往研究と本研究の位置づけ

まず、「丹波生活衣」についての既往研究は、蒐集者川口三千子氏自身による一連の著作がある(川口1987, 1992, 1995, 2000)。これらにおいては、蒐集の経緯や蒐集品の由来や履歴が自身の体験や聞き書きをもとに生き生きと記されている。また、奥村萬亀子氏は「丹波生活衣」の調査を実施してこられたなかで、福知山の衣生活についていくつかの重要な研究を行なっている(奥村1986, 1998, 2001)。が、川口氏奥村氏いずれの著作においても、寄裂に着目した研究は行なわれていない。

一方、寄裂着物に関する既往研究は、大きく二つに分けられる。第一は寄裂の着物について農山漁村の庶民の仕事着の一種として、標本的に採寸記録・形状分類を行なうもの。例として山崎1990, 川内1987などを挙げることができる。第二は芸術的歴史的に評価されている寄裂の着物について、採寸・形状分類に加えて時代背景に照合して意匠についての分析を行なうもの。代表としては神谷1961, 岡1990などがある。

第一のタイプの研究において、寄裂の意匠は、最低限の衣生活を満たすために必然的に継ぎ接ぎした結果と見られがちである。そのため作り手は意匠に対し無作為であったとされる。意匠について、研究者の個人的美意識で言及されることがあっても、作り手の美意識は問われないのである。

これに対し、第二のタイプの研究では資料の歴史的価値等に基づいて、意匠美が分析される。その資料は富裕階層の所有物であったり<sup>2</sup>、その時代において確立していた寄裂の意匠様式をもっていたり<sup>3</sup>する。これらは、はじめから装飾性を意図したことが明らかであるとされ、意匠にうかがわれる美意識についても研究される。

しかし、その意匠に既存の様式があてはまらない庶民の寄裂着物に関しては、意匠が研究の主題となることはない。神谷栄子氏の、「現存遺品資料並びに絵画資料から考察すると、庶民間での、一枚の衣服を作るのに幾種類もの裂を寄せ集めて仕立てなければならなかった乏しい衣生活がその根底にありながら、接ぎ合わせを行う立場に常時寄裂の装飾性を求めていたのが窺われる」(神谷, 1961, 146)との文章は、庶民の寄裂着物にも意図的装飾

<sup>2</sup> 「伝上杉謙信所用金銀欄縵子等縫合胴服」など。

<sup>3</sup> 対馬の豆殿に伝わるハギトウジンや東北地方の刺し子のように、寄裂の方法が様式化、一定化したもの。

性をよみとれることを示唆しているが、くわしくは論じられていない。

以上の既往研究に対し、本研究では、様式化されていない庶民の寄裂着物であっても、作り手はなんらかの装飾的意図や美意識を有していたことを証明したい。採寸と縫製順序の推定により、作り手がどのように意匠計画を行っていたのかを考察していく。

### 3 研究方法

本研究では、「丹波生活衣」から寄裂着物30点を選んだ。「丹波生活衣」には、30点以外にも、寄裂資料は多数存在するのだが、今回は、女物の上衣にしぼった。すると、でんち・ひっぱり・半襦袢・長襦袢・間着・長着といった形態の上衣に寄裂着物が確認された。これらの上衣が新しい一反の反物で仕立てられる場合のパーツをあげる(村林, 1990参照)。

- ・でんち／衿, 身頃 (左右2枚), 襦 (左右2枚)
- ・ひっぱり／衿, 身頃 (左右2枚), 袖 (左右2枚)
- ・半襦袢／身頃 (左右2枚), 衿, 半衿, 袖 (左右2枚)
- ・長襦袢／衿, 半衿, 身頃 (左右2枚), 袖 (左右2枚)
- ・単衣長着／衿, 掛け衿, 身頃 (左右2枚), 衿 (左右2枚), 袖 (左右2枚)
- ・袷長着／表: 単衣長着と同じ／裏: 胴裏 (左右2枚), 前裂 (左右2枚), 後ろの裾裂 (左右2枚), 裏衿 (左右2枚), 衿あたま (左右2枚), 裏袖 (左右2枚)
- ・間着／表, 裏とも袷長着の裏と同じ場合もあるが, 長着の表と同じパーツ分けになることもある

一般にはこれらのパーツを縫い合わせて着物を仕立てるわけであるが、これをもとに寄裂着物のタイプを分類する。

- A, パーツ別に複数種類の裂を用いる。
- B, 1パーツを構成するのに複数種類の裂を接ぎ合わせる。
- C, 1パーツを構成するのに同種類の裂を接ぎ合わせる。
- D, 仕立て上がり当初にあて布をしている。あて布はその下の裂と同種類。
- E, 仕立て上がり当初にあて布をしている。あて布はその下の裂と別種。
- F, 着用しているうちに部分的に傷み, あて布や継ぎ接ぎをした。

大きく分けてこの6タイプの継ぎ方があるが、複合タイプもある。たとえば、身頃はCだが、袖はBであるというタイプである。その場合はBCと表記することとし、表1に30点の資料を列挙し、寄裂のタイプも示した。名称・年代・用途・採集地・所有者の情報は『丹波生活衣

コレクション調査報告書』(福知山市, 1994)から得たものである。

本資料の調査では、資料を平面に置いて採寸などの実測を行なった。しかし、考察においては、資料を平面で研究するだけでなく、着付けた状態も重視した。着用目的で仕立てられた資料の性質を理解しやすいと判断したからである。ひっぱりや長着は左上に前で合わせた状態、下着の場合は上に長着を着た状態を想定する。その上で、第三者に見える部位と見えない部位を考慮しながら考察を進めた。

### 4 結果と考察

#### (1) 時代への対応

「丹波生活衣」全体は、江戸末期から昭和30年の資料で構成されている。しかし、本研究の資料となった30点の年代は明治から昭和の戦中期までである。戦後、寄裂着物はつくられなくなったといえる。「丹波生活衣」全体では、人絹織物など化繊素材を用いた資料が昭和初期から増えはじめる。たとえば女物のよそゆきの衣類に昭和初期、人絹を用いた袷長着がある。しかし本資料30点の素材は絹・木綿・モスリンの三種類で化繊素材は用いられていない。化繊素材は、衣類が着古されて寄裂着物の材料として再利用される、というサイクルに何らかの理由で組み込まれなかったといえる。

30点の用途をみると、仕事着が10点、普段着が1点、よそゆきが15点、用途が明らかでないものが4点であった。仕事着は着用しているうちに破れたりすり切れたりする度にあて布をして補修を重ねる。そのように着つぶされて最後には雑巾になったりするため、衣類の形で現存していることが少ないのかもしれない。それを考慮しても、継ぎ接ぎの着物をよそゆきが50%占めていることは特筆に値する。資料17・18・25(写真1・2・3)は、裕福な家庭の子女の衣類であることが聞き取り調査から明確になっている。家庭の経済状況が貧しいから衣類不足で、継ぎ接ぎの着物を着用しなければならない、というわけではないようだ。福知山において近代、小さな裂を再利用して寄裂着物をつくることは貧困が根拠ではない。社会全体、現代のように衣料品が豊富でなかったのである。貧富の差に関わらず、仕事着であれ、よそゆきであれ、継ぎ接ぎをして衣類をつくったのだ。大量生産による衣料品が大衆に出回る以前、継ぎ接ぎやあて布で着物をつくることは、貴重な余り裂を衣類として活用する手段であったともいえる。普段着が着物から洋服に移行し、大量生産による衣料が出回る昭和20・30年代、「丹波生活衣」から寄裂着物が姿を消す。普段着として着物が着用され、その着物が家庭内で縫製されていた時代を、寄裂着物が象徴しているのかもしれない。

年代別にみると、昭和期の寄裂着物は明治・大正のものとは異なる特徴をもつ。たとえばでんちだが、本資料の

表1 本研究資料内容一覧

整理番号	名称	年代	用途	素材	採集地	所有者	寄裂のタイプ	布種類数	布枚数
1	でんち	大正	仕事着	木綿・絹	市内		BF	9	24
2	でんち	大正	仕事着	木綿・絹	市内		B	4	16
3	でんち	大正		木綿・絹	市内		BF	7	22
4	でんち	明治	仕事着	木綿・絹	市内		AF	5	25
5	でんち	明治末	仕事着	木綿・絹	市内		AC	4	18
6	でんち	明治		木綿・格子	市内		C	1	13
7	でんち	昭和初期	普段着	絹		今川義成	BC	66	208
8	でんち	昭和戦中		絹		河渡栄	B	21	36
9	本裁女物もじり袖単衣ひっぱり	明治	仕事着	残り糸(生糸を含む)で織った	市内		CF	1	8
10	本裁女物給ひっぱり	明治・昭和戦前	仕事着	手織木綿			F	3	23
11	本裁女物もじり袖単衣半襟裄	明治	仕事着	木綿・絹	市内		B	5	20
12	本裁女物給半襟裄	明治	よそゆき	絹・地絹・木綿	中	塩見壽所、加藤ゆくの品	ACE	12	34
13	本裁女物単衣半襟裄	明治中期	よそゆき	木綿・絹	市内		AE	5	10
14	本裁女物給半襟裄	明治中期	よそゆき	絹・モスリン			BCE	13	32
15	本裁女物胴単衣半襟裄	明治後期	よそゆき	木綿・絹・モスリン			AE	8	23
16	本裁女物給半襟裄	明治後期	よそゆき	絹・地絹			BDE	6	33
17	本裁女物給半襟裄	昭和戦前	よそゆき	絹・木綿・モスリン	市内新庄	足立和子	BE	12	36
18	本裁女物給半襟裄	昭和戦前	よそゆき	絹・木綿・モスリン	市内新庄	足立和子	BE	13	33
19	本裁女物胴単衣半襟裄		よそゆき	木綿・絹			A	4	8
20	本裁女物給長襟裄	明治	よそゆき	絹・地絹・木綿	中	塩見壽所、加藤ゆくの品	BC	9	49
21	本裁女物給間着	明治末	よそゆき	絹			BOE	5	51
22	本裁女物給間着	明治末	よそゆき	絹・地絹			BOEF	5	46
23	本裁女物給間着	大正初期	よそゆき	絹・地絹			BOE	4	46
24	本裁女物給長襟裄	大正	よそゆき	絹・木綿・モスリン			BCF	5	30
25	本裁女物綿入れ長着	明治初期		千筋系絹・絹・木綿	安井	庄屋の奥さんのもの	ABEF	13	47
26	本裁女物給間着			絹・地絹			BE	5	30
27	本裁女物単衣長着	明治中期	仕事着	木綿			BF	14	92
28	本裁女物綿入れ長着		仕事着	木綿			BCF	8	55
29	本裁女物給袖		よそゆき	絹			C	2	8
30	本裁女物給袖	大正	よそゆき	絹			BC	3	19

でんち8点のうち昭和の2点のみ素材が絹である。昭和の4点に関して寄裂のタイプをみると、F(着用しているうちに部分的に傷み、あて布や継ぎ接ぎをした)がなく、ほつれやすり切れなど目立った損傷もなく着古されていない。また、4点とも上質の絹を多く用いている。明治・大正初期の資料には色むらのある粗悪な裂が用いられていることもあるが、昭和の4点には質の高い裂が使われている。以上より昭和の4点は、でんちや襦袢という衣類の必要性からつくられたというより、手元に大切に残留している裂を活用するためにでんちや襦袢になったという印象をうける。また化学繊維の普及により、明治・大正期に較べて衣料が豊富になりはじめた昭和初期、厳選した素材で寄裂着物がつくられたといえる。

## (2) 赤色の位置

赤い裂の扱いに法則があるようだ。朱色、紅色、緋色、また細かな柄があっても全体の色の比率として赤っぽい裂を一括りに「赤い裂」とこの項ではおおざっぱに表現することにする。赤い裂を用いた資料は30点中10点であった。寄裂の衣類において、赤は胴部分に配置されていることが多い。次に赤色使用の特徴を列挙する。

- ・赤が用いられている資料は、襦袢や間着など、すべて長着より下に着るものである。つまり、長着を上に着付けた状態では、第三者にはほとんど見えない衣類である。ほとんど見えないのだが、襟元と袖口、袖振りから少し見える。間着の場合は長着と重ねて一緒にたくし上げるため、左上前衿下からも見える。
- ・10点のうち胴部分に赤が配されているのは8点である。あとの2点だが、資料29は袖だけの資料であり袖裏に紅絹がついている。もう一点の資料15は胴は紺で袖裏の袖口と振りのみ赤である。
- ・赤い裂が用いられている10点中、表の袖口と袖振りに赤が配置されているものはない。表袖に赤が用いられていても、袖口と振りは別裂を縫いつけるなど、その部分のみ赤を隠している。
- ・裾に赤を配しているのは資料22のみだが、第三者の目にふれやすい左上前衿には別裂を配している。

以上から赤い裂は、第三者の目に触れにくい衣類に、かつ第三者の目から隠すように配置されていることがわかる。

近代、若い女性の長襦袢には緋色が用いられた(青木, 1991, 165)。それは一説には染料の紅の殺菌効果を信じて肌の衛生のために、紅絹を下着や着物の胴裏などに用いたといわれる。「丹波生活衣」には紅絹裏の留袖など多く存在するが、留袖など礼服は必ず肌襦袢なり、長襦袢なりを重ね、素肌に直接着ることはない。従って留袖の裏に紅色の裂を縫いつけても、肌に直接触れないので紅の殺菌効果はない。紅絹は滑りが良い素材であるから長着との摩擦を軽減する機能もあって、下着や着物の裏に

は紅絹をつけることが、近代には形式化していたにちがいない。形式化していたからこそ、日本人の下着に白い裂が用いられるようになった戦後、留袖の裏も白の平絹に変わったともいえる。近代において紅絹は若い女性の下着を意味する記号なのである。また、「明治時代はだいたい重ね着が特徴である。それは上着と下着があり、三枚あるいは二枚重ねて着るのが通例であ」(同, 163)り、また衿元・袖口・裾まわりは縮緬などの上着用の裂が幾枚か重なっているかのように見せるため工夫した上着と下着の組み合わせ形態があった(同, 164)。つまり間着や襦袢は下着的機能と長着の延長部的機能をあわせもつ。そのような矛盾した機能要求の下、袖口や裾など第三者の目に触れる部位のみ長着に使うような裂を配置し、第三者の目に触れない部位には紅絹を配する間着や襦袢が生まれたのである。この配置形式は胴抜仕立てといわれ当時一般的な仕立て方である。

通例として大きく分ければ、次のようなパーツが縫い合わされて胴抜き仕立ての下着ができる。

衿：上等の裂

裾：上等の裂。前身頃裾2枚、衽裾2枚、後ろ身頃裾2枚。

袖口：上等の裂。左右2枚。

振り：上等の裂。左右2枚。

胴：紅絹。左右2枚。

袖：紅絹。左右2枚。

本資料の胴抜きの下着は、たとえば資料17(写真1)の表前面の胴部分は3種類19枚、同じく資料18(写真2)は6種類19枚、資料21の表両袖は3種類7枚の赤い裂が継ぎ接ぎされている。資料17など1×6cmの裂まで使って赤い部位を成り立たせている。また、赤い裂の素材としては紅絹だけではなく、紅絹より上質の絹や滑りの悪い木綿も並べて接ぎ合わせている。色が赤いことのみを条件に配置を定めているのである。離れて見れば、接ぎ目がぼやけて、紅絹を配した胴抜き下着に見えるように意図したのであろう。そして、前述のように紅絹を配置する部分は、長着を着付けると第三者には見えない。

要するに材質に関わりなく、赤い裂が一定の部位に集中的に継ぎ合わされていることがわかる。若い女性向きの胴抜仕立て下着、という世間一般で定形化していた下着の型に近い状態で完成させようとした結果である。つまり、限られた余り裂を配置していくにあたって、作り手は当時の慣習にしたがって、秩序をつくりだしていることがわかる。

## (3) 材質の使い分け

30点の資料に用いられている素材は、絹、木綿、モスリンのみである。この3種類の素材と衣類の部位に法則があるように感じられる。前項では、裂の質感や柄に関係なく若向き胴抜下着という観念に従って、赤は第三者

の目に見えない部分に集める，という法則を述べた。しかし、福知山では絹も木綿も産し、糸に紡ぎ、織るという工程を地域または家庭内で行なっていたわけだから、素材の善し悪しには敏感であったと思われる。材質による配置分けがある，という仮説を検証したい。

### (a) 地絹

まず絹が用いられる資料を見ていく。絹は絶対的価値のある素材である。福知山は養蚕の産地であるため絹が身近に豊富に存在していたといえる。しかし「生産した繭は少しでも多く換金したかったのであろう。玉繭や屑繭も京都府産業統計に掲載されているし…(中略)それでも売れない玉繭・屑繭が家庭用として(奥村, 1998, 247)」用いられたようだ。商品化された絹物が、庶民の家庭に豊富にあったわけではない。封建体制下における絹類規制から解放され着用可能になったといっても、絹は庶民にとっては貴重であり、軽くて光沢のある材質の魅力も手伝って価値ある素材であった。本研究の資料において、絹がいずれかの部位に用いられているものは22点。22点すべてにおいて、絹は第三者の目にふれる部位に配置されているのも絹の価値が絶対的である所以だろう。

ただし、そのような絶対的価値を誇る絹にも例外がある。地絹<sup>4</sup>である。福知山において、この裂は必ずしも高く評価されるものではなかった(同, 248)。本資料のうち地絹が使われているものは6点ある。地絹の用いられている資料の特徴を次に挙げる。

- ・6点すべて、長着の下に着る衣類である。また地絹が表に配置されているときは、長着を着付けた状態で第三者の目に触れない部位にある。第三者の目に見える部位には、縮緬・羽二重・甲斐絹などの絹が用いられる。
- ・資料22は、長着を着た状態で見えるであろう袖裏の振りも地絹である。この地絹の色は赤である。前項と考えあわせると、袖裏に関しては、下着的機能を優先して赤を見せる場合と、長着の延長部的機能にあわせて別裂を縫いつける場合と二つにわかれる。資料22、裏袖振りの地絹紅絹は前者といえる。前項の結果、下着的機能に従って裂を配置するときは「赤」であることが前提で裂の材質を問わない。しかしながら資料22にも袖裏の袖口、表の袖口や振り、裾には別の絹が重ねて縫いつけられているため、見える部位には地絹でない裂をもっていくという意図が働いているといえる。
- ・資料16(写真5)の場合、「見える」裏袖口に地絹が配されている(図1参照)。資料16の袖裏はまず図2のような長方形がつけられ、この上から裏袖口の地絹と裏

袖振りの縮緬が縫いつけられた。裏袖振りの縮緬cは表の袖と同じ裂なのだが、2.8×24 cmと1.2×24 cmの細い裂を接ぎ合わせて振り裂にするなどc裂が不足していたと考えられる。従って裏袖口にまでc裂を縫いつけられなかったようだ。しかし、裏袖口にもe8やe4などと同じ地絹、e5・e9・e1といった別裂で重ねて袖口裂が縫いつけられている。地絹の特徴の一つに薄いことがあげられる。あまりに薄く衿仕立ての裏に使うと表の柄が透けていることがある。資料16の裏袖口では、同じ地絹だがもう一枚重ねることによって透けることなく、薄いという地絹の短所を打ち消しているのである。資料16に関して、「見える」部位で地絹は隠されるか、若しくは特徴を否定されているのである。

- ・次項で検証するが左右同じ裂を配されることが多い中、資料26の表衿先と資料22の裏衿裾は左右異なる裂になっている。二例とも、上前にかくれる右に地絹が用いられている。

以上から、地絹は意図的に第三者の目に触れない部位に用いられることがわかる。つまり「見えない」部位には低い評価の裂を用いるという配置分けが明らかになる。

### (b) 木綿

次に木綿について考察する。絹などに対する木綿の位置づけを確認するため、異素材とともに木綿が用いられている資料について、特徴を次に挙げる。

- ・資料19は、表袖の材質は甲斐絹。甲斐絹はすべりが良いため、長着との摩擦を考慮して袖に配置した可能性もある。ただ、長着との摩擦が考えられない半衿にも絹が配置されていることから、実用性と関係なく絹は「見える」部位に配置するという認識があるともいえる。
- ・資料24に関して、表袖は2種類の縮緬を継ぎ接ぎして、袖口・振り・裾が同種類の裂になっている。「見える」部位から同種類の裂を「見せる」工夫をしている。衿に関しては半衿を上から重ねて着用していたか否かが不明であるためはっきり絹との位置関係をのべることができない。が、この下地に衿芯になるような裂も入っていないし、おそらくこの木綿の上から半衿を縫いつけると考えられる。従って、衿元に木綿が見えることがない。
- ・資料12・19・24に関して、着物の表の「見える」部位には必ず絹が配置され、木綿は隠されるのだが、裏は「見える」部位にも木綿が用いられる。
- ・資料25・28は木綿以外の素材の使用が極端に少ないため、異素材と比べたときの木綿の位置関係がよみとりにくい資料といえる。資料25の資料は、裏は数種類の木綿で継ぎ接ぎされている。表は紺千筋糸縷の一種類で継ぎ接ぎのない長着であるが、掛け衿に黒襦子が縫いつけられている。高価な裂を掛け衿に用いることは

<sup>4</sup> 福知山では屑繭を紡いだ糸で家庭で家人のために織った平織りの絹を指す。川口三千子氏によると、薄くて破れやすいこともあってか、人々は卑下して地絹を用いたという。

当時形式化していた。資料28も表が縞柄の木綿一種類のみで継ぎ接ぎなし、裏は数種類の木綿と袖口のみ絹で継ぎ接ぎされているという資料である。

- ・資料のなかで、木綿が配置されている部位、23部位のうち18部位が確実に第三者の目に触れない部位である。
- ・木綿が異素材とともに用いられた資料は9点あるが必ず絹も用いられている。

以上から、絹と継ぎ接ぎされるとき、木綿は「見えない」部位に配置されることが多いといえる。同時に、地絹の場合、袖裏に用いられるときでも「見える」部位では隠されるか、特徴が消されるのだが、裏における木綿の場合は「見せる」状態で配置されていることも特筆できる。

### (c) モスリン

最後にモスリンという素材に注目する。明治中期から大正初期、モスリンはネルやセルとともに外来の毛織物であるが、和装用着尺として一般に普及した(横川, 1998, 49)。またモスリン友禅などによれば、鮮やかな色・柄が染色された。外来の毛織物を和装に取り入れたのだから、明治初期には珍重されたであろう。しかし、大衆の日常着として出回るうちに「ありふれた素材(同, 49)」になり、大正時代もおわりには銘仙に取って代わられた。本資料中、モスリンの裂を用いたもの6点について、特徴を次に列挙する。

- ・モスリンを用いた資料6点中、資料11のみモスリンという素材を「見せる」部位に配置している。資料11では半衿にモスリンが用いられている。半衿という部位は、「この新たに出てきた半衿は新興の衣服装飾として、明治期に全盛をみるのである(青木, 1991, 151)」とあるように第三者に装飾として「見せる」ものである。
- ・モスリンを用いる6点中、資料11以外はよそゆきである。
- ・資料11はもじり袖であることから仕事着という分類になっているが、袖部分に絹を用いているためお洒落着的要素もふくんだ仕事着といえる。
- ・資料11の年代は明治である。まだモスリンが「ありふれた素材」になっていない時代である。結果、資料11は当時の流行素材を気楽なお洒落着の半衿にとりいれたといえないだろうか。資料11の袖には絹が用いられているのだが、一つの着物の半衿と袖という「見せる」部位に絶対的価値の絹と流行素材モスリンが並んでいるのは時代性によるものともいえる。
- ・資料15に関して、用いられている部位は裏袖口と裏袖振りである。このモスリンの色は、色が若い女性の下着を意味する赤色である。ここでは下着的機能を優先させ、素材に関係なく赤い色だからこの「見せる」部位に配置したといえる。つまり素材が偶然、モスリンだったということで、モスリンという素材を見せてい

るわけではない。

- ・資料11と15を除いた、のこる4点ではすべて「見えない」部位にモスリンが使われている。

以上、奇裂着物の素材、絹・地絹・モスリン・木綿に注目してきた。絹は優先的に「見える」部位に配置される。絹が用いられる場合、100%「見える」部位にある。それに対して、地絹・モスリン・木綿は「見えない」部位に配置されがちである。特に地絹は「見える」部位から徹底的に排除される。別裂で隠されたり、もう一枚地絹を重ねることによって、地絹の薄くて透けるという特性を消し去られるのである。木綿も「見えない」部位に配置されることが多いが、裏袖口などで「見える」状態に配置されている例もあった。このことから地絹は、木綿よりも見せたくない素材だったといえる。絶対的価値をもつ絹と同じく、蚕の繭からつくる織物でありながら、福知山の人々は地絹を絹と認めていない。しかも、絹に次ぐのではなく、木綿と同等かより劣る位置に据えられていたのである。モスリンは明治維新後、国外からもたらされた新しい素材であった。その流行の有様が資料11に反映されている。以上より、継ぎ接ぎによって着物を仕立てるとき、人びとは当時の価値観の中で素材を区別し、第三者の目に触れるかどうかという基準に従って配置していくことがわかった。

## (4) 左右対称性を基本にした意匠計画

### (a) 左右対称の場合

奇裂着物で構成する本資料では、数種類の裂を使いながら左右対称に継いでいるものが多い。そうした資料の特徴を次に列挙する。ただし、本資料は年月の経た衣類であり保存されていた環境も良好ではないものもある。従って、仕立てられた当時よりも寸法に若干のくずれが生じていることを考慮し、1~2 cm内の差は無視する。

- ・本資料30点の表前面・表背面・裏前面・裏背面あわせて116面中65面が該当した。数字の割合としては6割近くである。
- ・残りの4割も、ある程度左右対称に配置されている。逆にすべての裂が無秩序に配されているものはない。
- ・ここで意図的に左右対称性がつくられているのではないかと考える。しかしながら奇裂着物に用いられる裂は、古くなった着物を解き、破損した部分などを除いて端裂にして再利用したものが多い。左右対称の寸法に仕立てられる着物から、等面積の二枚の端裂ができる場合も多いであろうから、左右に同じ裂を配分して左右対称の奇裂着物ができたのだろうとも考えられる。ところが、接ぎ目は非対称になっているが、左右同じ位置に同種類の裂が同じ大ききで配置されているものがある。たとえば、資料22の表背面は一見左右対称である。しかし左後ろ身胴部分は1枚、それに対して右後ろ身胴部分は5枚が継ぎ合わされて対称になっ

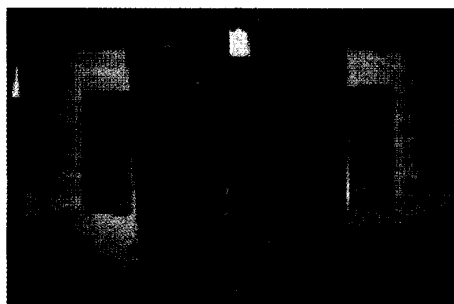


写真1 資料17 半襦袢表前面

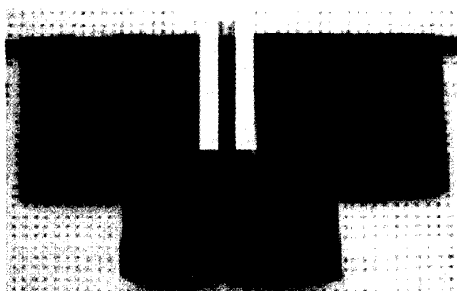


写真2 資料18 半襦袢表前面

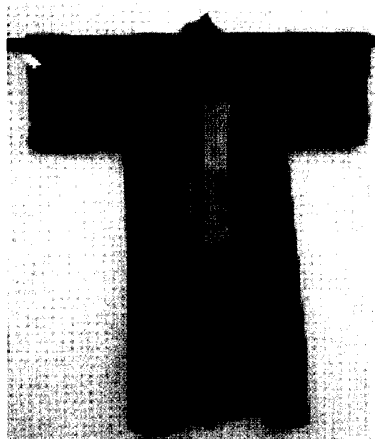


写真3 資料25 長着裏前面

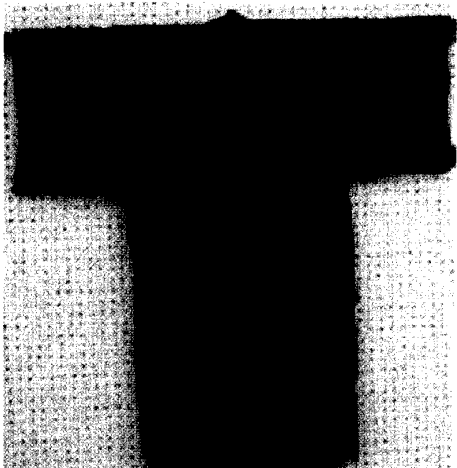


写真4 資料27 裏背面

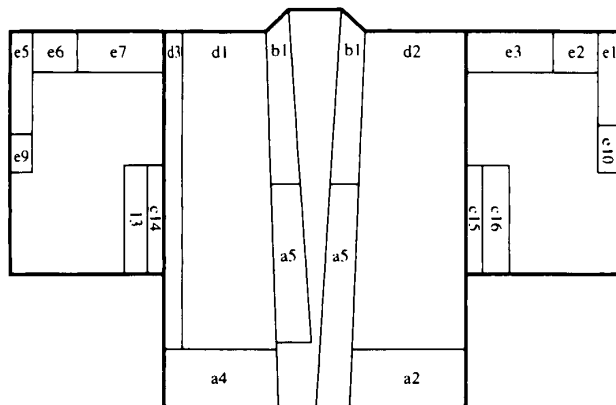


図1 資料16の表全面

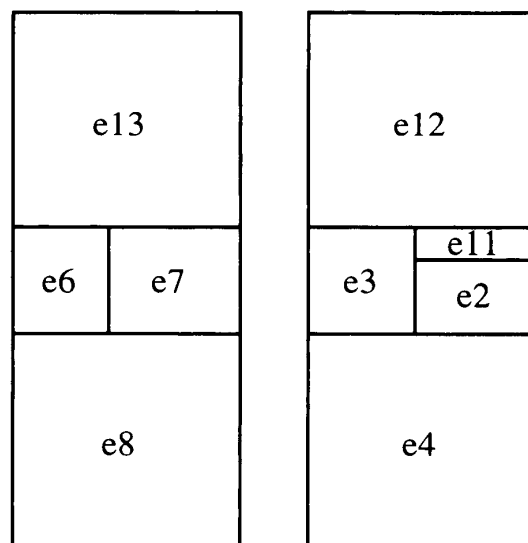


図2 資料16の袖裏布配置

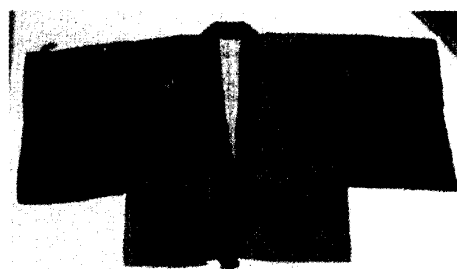


写真5 資料16



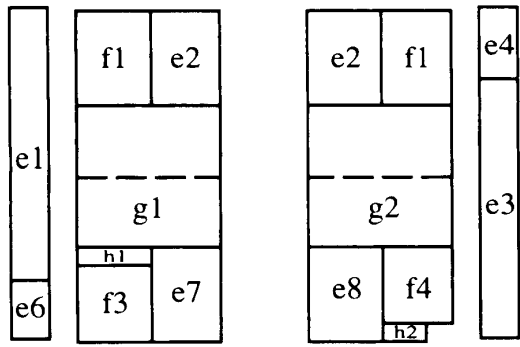


図3 資料15の袖裏

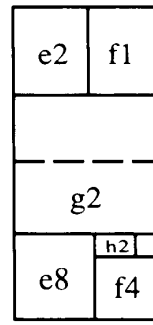


図4 h2の可能性

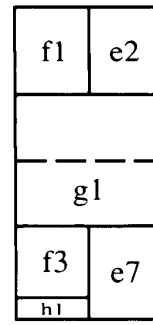


図5 h1の可能性

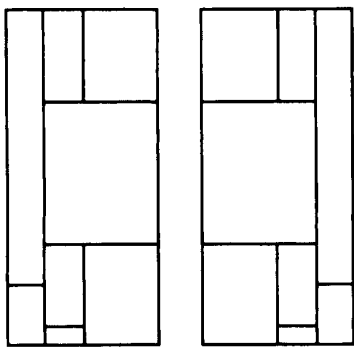


図6 継ぎ目が対称になるとき

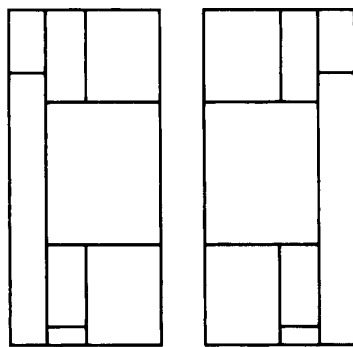


図7 継ぎ目が対称になるとき

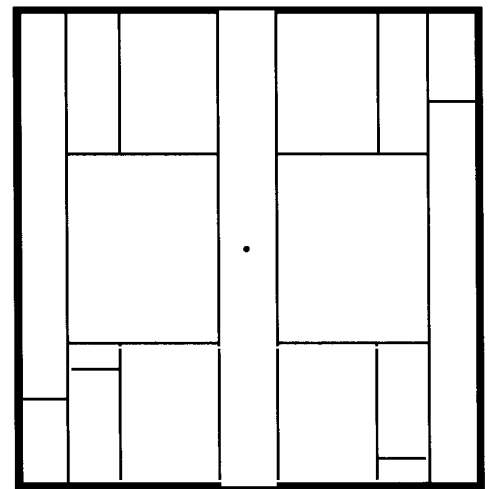


図8 現状と対称性



写真6 資料15 袖裏

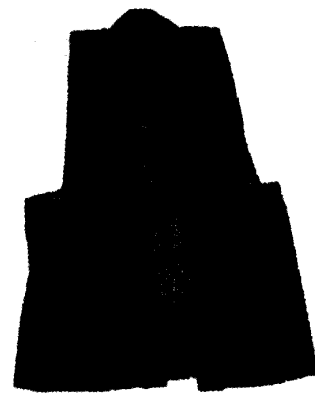


写真7 資料5

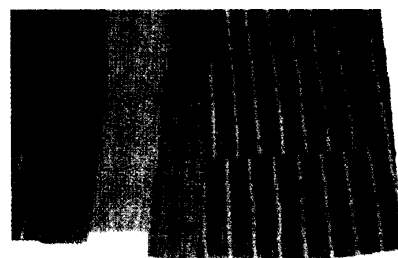
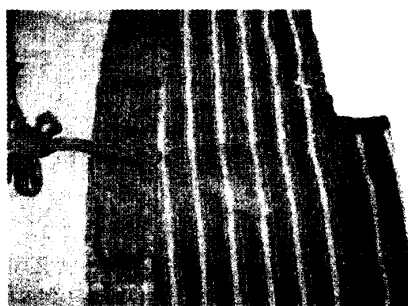


写真8 資料5 部分

ている。そのような資料は14点あった。

- その14点とはつまり、同じ裂が2枚そろっていない場合にも、同じ種類の裂を継いで、2枚ずつ左右等面積・同種類のパーツをつくり、左右同じ位置に配置している例である。つまり再利用の際に2枚同じ裂ができるから左右対称の寄裂着物ができるわけではない。左右対称にするために苦勞して2枚の同じパーツをつくっているのである。これは単に端から余り裂を継ぎ接ぎしていくというのではなく、左右対称の意匠を意図的に計画している行為である。

### (b) 左右非対称の場合

次に、「見える」部位、「見えない」部位で分けて、左右対称性を調べると、左右が等しく「見える」部位、袖口と袖振りには必ず同種類の裂が配置されている。「見える」部位には同種類の裂であるにも関わらず、「見えない」部位で左右非対称という資料が8点存在する。

- 資料16(写真5・図1)は右衿先が裾から11 cm 短い。左衿先は裾までである。後で右衿先を中に入れ込んだ様子がなく、右衿先が着ているうちに破損したわけではない。衿の長さが左右非対称で仕立てられたものである。衿は着付けてしまうと左が右の上に重なり、右衿が「見える」のは衿元のみで衿先は左身頃下に隠れて見えない。おそらくそのことを考慮して、裂が足りない分、見えない右衿先を短く仕立てたのである。
- 資料17の半衿も右が短い。資料16と同じ要因が考えられる。
- 資料22の衽裾は左が絹で右が地絹である。左衽裾と同じ絹が足りず、「見えない」右裾には地絹を配置したのである。
- 資料11は裏袖口に襷子があてられているのだが、右側が短いため、袖口下の「見えない」部位で対称性がくずれている。
- 資料26の裏袖振りについて、裏背面の左振りは  $8 \times 27.5$  cm の長方形の裂  $e_3$ ,  $8 \times 7.5$  cm の  $e_1$  と  $8.8 \times 17$  cm の  $e_4$  を継いで右振りに配置しているのだが、 $e_4$  の幅が広い長方形におさまっていない。しかし着付けると第三者には、端から8 cm にある袖のズレは見えない。

以上から、左右「見える」袖口と振りには同種類の裂を「見せる」ために、着物の仕上がりとして資料11・26(裏袖振り)は非対称になっているといえる。着付けた場合に左のみ「見える」部位により上質の裂を「見せる」ために資料16・17・22は非対称になっている。資料24・25の裏衿の中程は「見えない」部位であり、左右に同種類の裂が配置されているが、寸法がズレているため非対称になっている。資料26の表衿も「見えない」部位で対称性がくずれている。これらから「見える」「見えない」という第三者の目への意識は、仕上りの見た目よりも優

先されることがわかる。

### (c) 左右非対称の意匠に見る計画性

資料15の裏背面袖(写真6)は、「見える」部位は左右同種類の裂が配置されているが、「見えない」部位で左右非対称になっている。一見、その他7点と同じパターンだが、資料15の場合は裂の寸法が合わないために非対称になっているのではない。裂の寸法としては、左右対称の配置になる可能性がある。

この資料のモスリンは虫食いによる破損があり、その部分からモスリンの下にどの裂があるかがわかる。この方法により、袖口裂がつけられる以前を想定し図3に示す。

- これにより  $h_2$  が小さく、左袖角の欠如を隠すために袖丈いっぱいには袖口裂をつけたことがわかる。(袖口裂は、通常、袖山から下25 cm ほどの長さである)
- 仮に  $h_2$  を図4のように  $g_2$  につけると、袖口裂は途中で継いでまで袖丈いっぱいにつける必要はない。しかし  $h_2$  がこの位置であると、ちょうど袖口留めが欠如部分になり強度上好ましくない。従って、 $h_2$  は現状が適当な配置であり、欠如部分を補うため、袖口裂は袖丈いっぱいには縫い付けられ、欠如のない右袖口裂も左右の均衡を考慮して同じく袖丈いっぱいには付けられたと考えられる。 $h_2$  は強度上、現状の配置に理由があるが、 $h_1$  は図5のように袖底に配置しても問題ない。このように配置すると、裏背面の裂配置に左右対称性ができる。また図6や図7のように、袖口裂の継ぎ目も左右対称にすることも可能である。左右対称になる可能性をもちながら、現状の図8のように左右の対称性をくずしていることに作り手の意図を感じる。

作り手はなぜ左右の対称性をくずして、意匠にそのような秩序をつくったのだろうか。両袖裏を並べて、この左右非対称性を考察し直す。まず、図8の青線で囲んだ部分で左右の袖口裂の継ぎ目を見ると、真ん中の青い点を中心に点対称になっている。また、黄線で囲んだ部分だけをみると、 $h_1$  と  $h_2$  はやはり黄色の点を中心に点対称になっている。袖口裂の継ぎ目と  $h_1 \cdot h_2$ , 左右対称性をくずしている配置は点対称を生んでいる。資料15を仕立てた人が点対称になるように考えて配置したかどうかは明確にできない。また点対称ではなく、「見えない」部分で左右非対称の面白みを考えたのかもしれない。しかしいずれにせよ、第三者の目に束縛されない部位で、資料15の作り手が独自の感性を發揮させたといえるのではないだろうか。

### (5) 柄合わせにみる意匠計画

もう一つ、作り手独自の感性をよみとれる例がある。資料5(写真7)でんちの表前面と資料10ひばりの表前面における縞柄の合わせ方である。でんちやひばり

の用途の分類としては仕事着であり、防寒用の家着である。家着であるから、よそゆきほど第三者の目を意識して仕立てる必要がない。ただし長着の上に羽織る上衣であるためか、作り手が仕上がりの見た目を意識して、意図的に秩序をつくっている。資料10は袖や裾がすり切れるなどで破損し、あて布がされている。表前面左袖のあて布は異なる布を使用しているが、その他4カ所は元の布と同じ柄のあて布がされている。縞柄だが、縞をきっちり合わせて接ぎ合わせている。同じ柄のあて布をしている4カ所ともあっていることから、意図的に柄を合わせているのである。

資料5は仕立て当初に、一構成パーツ内で数枚同種類の布を接ぎ合わせている。表前面の右肩・左胴・左裾、表背面の中央辺りで継がれている。この資料も縞柄だが、柄が合っている箇所とズレている箇所がある。合っているのは、表前面左胴と表背面中央横一直線である。ズレているのは表前面の右肩と左裾である(写真8参照)。ズレ方なのだが、接ぎ目を対称軸にパターン<sup>5</sup>の2分の1だけ平行移動させているのである。右肩、左裾とも布幅がぎりぎり、偶然2分の1だけ柄がずれたとは考えにくい。やはり、意図的に柄を2分の1ずらして接ぎ合わせたと考える方が自然である。紺と薄黄の縞であるから2分の1ずらすと、接ぎ目が目立つ。左胴では縞を合わせて接ぎ目を目立たなくし、右肩と左裾では縞をずらして接ぎ目を強調する。表前面の平面で考えるとき、右肩と左裾は点対称の位置ともいえる。余り布で、身丈に合う着物を仕立てるには布を接ぎ合わせなければならない。この制約を接ぎ目に秩序を持たせることによって、意匠に昇華させているのである。

## 5 結 論

### (1) 寄裂着物にみる意匠の社会性

近代、紅絹を胴に用いる間着や襦袢は、胴抜き下着として形式化していた。福知山だけではなく、各地で行なわれた着物の形式である。本資料の胴抜き下着は、本来は一枚の紅絹を用いる部分を、材料不足が原因で継ぎ接ぎすることになったものである。しかも紅絹が足りず、赤色の木綿なども混ぜてあたかも一枚の紅絹で仕立てたかのように見せようとしている。裂を接ぎ合わせて仕立てるとき、単に体の寸法に合わせて裂を足していくのではない。胴抜きという形式があることを知って、意図的にそれに近い形式をつくらうとしているのである。

寄裂着物において、第三者から「見える」部位「見えない」部位によって素材は区別される。絹は必ず「見える」部位に配置される。なかには、絹が足りずに木綿が「見える」部位に用いられったり、流行に合わせてモスリンが最も「見える」部位に配される場合もある。しかし地絹だけは、別裂で隠されたり、地絹の特性を消してまで、「見える」部位から排除されるのである。地絹のみで

仕立てる場合は、羽織や長着にも用いられ、人目をひくような色に染められることもある。にも関わらず、絹とともに寄裂着物を構成するとき、地絹が人目から遠ざけられる。このことは当地の地絹に対する評価を表している。地絹は、商品化できず、家庭内・地域内で用いる素材である。他の地域でその価値を認められておらず、地絹は「見せる」ものではないのだ。「見える」部位には縮緬や縹子といった、他の地域でもその価値が認められている素材が用いられる。こうして「見える」部位の配置は、他の地域でも通用する価値基準によって自動的に定まっていく。

着物の形態と「見える」部位には、当時の常識・流行・価値観が意匠となって表れる。これは福知山の人々が社会の情報に敏感に反応したことを意味している。

### (2) 寄裂着物の意匠にみる独自性

平面に置くと、衿の長さが左右アンバランスになっている資料がある。おそらく裂が足りなかったのだろう。裂が短くても、長さの半分で折り、その折り目を背中心と合わせて縫えば、衿は左右同じ長さで仕上がるはずである。しかし本資料では、裂が足りない分、着付けると「見えない」右衿を短くしている。平面で見たとき、裁縫の常識では左右等しいことが正しい。ところが人が身に着けた状態では、その常識が成立しているか否かなどあまり重要ではない。資料17でいえば、流行の半衿をゆったり「見せる」ことに着用者の関心はある<sup>5</sup>。だから着付けたときに、上前になる左が長くなるよう、半衿は縫い付けられた。このことは「見えない」部位において、作り手が常識にとらわれないことを示唆する。

考察のなかで、裂が背縫いを軸に左右対称に配置されることを明らかにした。意図的に左右対称の意匠が計画されていることも明らかにした。そのような中、資料15と5が特異な意匠を意図的につくっていることがわかった。資料15は「見えない」部位で、左右対称性をくずすことによって、意匠に対する独自の計画性を表している。資料5は家着という個人的な衣類において、独自の意匠美を実現させている。着物の形態と「見える」部位において、作り手は社会情報に従うことを優先して、個人の美的センスは左右対称性をつくるにとどまる。「見えない」部位と個人的な衣類において、常識・流行・価値観という社会性から解放されて、初めて作り手は独自の意匠美をつくり出す可能性をもつのである。

<sup>5</sup> 長着の衿合わせをゆったりと着付ける。それによって、半衿の見える部分が大きくなる。当時の流行の着付けである。この着付けに対応するためには、半衿が長目に縫い付けられていなければならない。

## 6 まとめ

本資料の寄裂着物において、第三者もしくは社会に直接相対することになる部位に、その時代共通の価値観を反映させる。対して、社会から隔たる部位において、福知山独自の素材と作り手の感性が存在する。社会に対する部位を寄裂着物の表面、社会から隔たる部位を内面と考える。すると、福知山の町家や地絹に見られる二層構造が浮かび上がってくる。福知山には独自の風土があり、産物がある。しかし、地理上・経済構造上、福知山は上方文化の影響を受け、またそれを取り入れざるを得なかった。そこで、表面は上方文化を取り入れ、内側に独自の文化をもつ。この二層構造が、福知山の文化を形成している美意識なのかもしれない。寄裂着物においても、表面は時代の価値観に迎合し、内側に独自性を見せる。寄裂における配置の秩序は二層構造の美意識の表れといえる。

## 謝 辞

本研究を行なうにあたり、京都府立大学名誉教授奥村萬亀子先生よりご指導いただきました。また福知山市丹波生活衣館およびそこに関わってこられたボランティアの方々には、たいへんお世話になりました。非営利活動に奔走する情熱あふれる皆様の姿は、本研究の大きな原動力となっています。本当に多くのことを学ばせていただき、ありがとうございました。そして「丹波生活衣」の産みの親である河口三千子先生に心よりご冥福をお祈り申し上げます。

なお本研究は、財団法人京都府立大学学術振興会より助成を受けました。

## 参考文献

- 青木英夫『下着の流行史』雄山閣出版 1991年  
 井之本泰「京都府の仕事着」神奈川大学日本常民文化研究所『仕事着—西日本編』平凡社 1987年  
 岩崎雅美「秀吉のキルティングの陣羽織にかんする一考察」『服飾美学』26号 1997年  
 岩崎雅美・田中陽子「ピーシングとキルティング—縫いの価値のよりどころとして—」『兵庫教育大学研究紀要』第13巻 1993年  
 上村六郎「丹波布」『上村六郎染色著作集』思文閣出版 1981年  
 梅原三郎・根本推明監修『福知山・綾部の100年』郷土出版社 1995年  
 岡通子「伝豊臣秀吉着用ピロード・マント」『風俗』103号 1990年  
 岡村吉右衛門「縞地木綿」『庶民の染織』衣生活研究会 1976年  
 奥谷松治『聞き書丹波の庶民史』平凡社 1977年  
 奥村萬亀子「『片身替・段替』のこと」『服飾美学』12号 1982年  
 奥村萬亀子「福知山地方における明治・大正・昭和の衣生活様式」『丹波地区学術調査報告』京都府立大学 1986年  
 奥村萬亀子「『丹波生活衣コレクション』にみる糸縞と地絹」『京に「服飾」を読む』染織と生活社 1998年  
 奥村萬亀子「戦後の染物『型置き』との出会い」『服飾美学』33号 2001年  
 神谷栄子「伝上杉謙信所用金銀欄縞子等縫合胴服について上・下」『美術研究』216・219号 1961年  
 川内知子「長崎県の仕事着」神奈川大学日本常民文化研究所『仕事着—西日本編』平凡社 1987年  
 河口三千子『おんなを織る』講談社 1974年  
 河口三千子『寺庭の四季』北星社 1987年  
 河口三千子『花綵日記』北星社 1992年  
 河口三千子『丹波生活衣つれづれ』北星社 1995年  
 河口三千子『丹波生活衣つれづれ続編』北星社 2000年  
 河村まち子「明治時代の女物着物についての一考察」『共立女子大家政学部紀要』36号 1990年  
 瀬川清子『女のはたらき』未来社 1962年  
 大日本蚕糸会『日本蚕糸業史』明文堂 1935年  
 鷹司綸子「文明開化と市井の人々」『服装文化』164号 1979年  
 田中陽子『仕事着とその周辺』実践女子大学 2000年  
 辻合喜代太郎「丹波木綿」『縞』衣生活研究会 1966年  
 長野市立博物館『仕事着—変遷と地域性—』1984年  
 中村たかを『日本の労働着』源流社 1988年  
 野上彰子「着継がれた上衣をよむ」『布のちから布のわざ』国立歴史民俗博物館 1998年  
 日浅治枝子「国立民族学博物館所蔵の労働衣服—国内収集の下半衣について—」『国立民族学博物館研究報告』5巻3号 1980年  
 福井貞子『野良着』法政大学出版局 2000年  
 福田英治「素材からみた京都地方の民族服—仕事着を中心に—」『服装文化』177号 1983年  
 福知山市『丹波生活衣コレクション調査報告書』1994年  
 福知山市史編纂委員会『福知山市史』第四巻 1992年  
 藤弘洋子「対馬の労働着ハギトウジンについて」『九州女子大学紀要』19(1) 1984年  
 村林益子『きものの仕立方』紫紅社 1990年  
 山崎光子「国立民族学博物館所蔵の労働衣服—とくに刺子の形態と染織の分析—」『国立民族学博物館研究報告』5巻3号 1980年  
 横川公子「素材の味わいということ」『服飾美学』27号 1999年